行動空間の馴れについて (第2部)*

——社会的馴れを中心にして——

東 北 大 学

宮 川 知 彰**

1. 問 題

みもしらぬ場所、はじめての部屋など、不馴れな空間では、われわれはいったいどのようなふるまいをするだろうか。このような疑問を中心とした一連の実験の結果については、すでに数年前の本誌上で述べたことがある(2)。そこでは、一度もはいつたことのないみもしらぬ部屋——いろいろな玩具、器具、書物の類、つまり「物」のみがおかれてあつて「人」がいない部屋——にいられた被験者 Vp. の行動についての描写がこころみられ、かれらが、このような不馴れな空間に対する馴れをどのようにして獲得していくかということの実験的解明がめざされた。その結果あきらかになったことがらの主要な部分をあげてみると次のようにいえよう。……人が不馴れな空間の中におかれるときは、その行動が極端に萎縮してしまうこともありうるが、多くの場合、まず最初に活発な探索的行動が展開され、その人のモチベーションの内容とその構造に即応して、不馴れな空間は認知的に構造化する。そしてこの認知的構造化が馴れた空間の成立をもたらすのであり、このことには単位時間内における行動数ないし行動方向数の減少という測定的事実が対応するのである。

しからば、みもしらぬ部屋、はじめての場所、不馴れな空間が、「物」だけではなく、「みしらぬ人」をも包含している場合、いや「物」はできるだけ最少の範囲にとどめられ、むしろ「みしらぬ人たち」によつて強く特徴づけられているときは、その中でどのような行動が生ずるのであろうか。今回の考察ではこの問題をとりあげるのであるが、前回の考察の中にもこの問題に関連すると思われる実験が含まれていないでもなかつた。すなわち、前回の考察においては、一度成立した馴れた空間

を破壊するために、その空間の中に「みしらぬおとな」を1名配置し、そのときの子ども(Vp.)たちの行動を観察したことがある。しかし、この観察はそれだけにとどまり、この「みしらぬおとな」に対する児童の反応がどのように変遷していくかについては観察しなかつた。

ともあれ、今回の考察では、前回にも予定したように、「みしらぬ人たち」の存在によって特徴づけられている「不馴れな空間」が「馴れた空間」へと転化する過程の解明に、つまり、社会的馴れの成立の考察に、重点をおくことにする*。

2. 実験 1 (互にみしらぬものばかりが同一空間の中に同時に配置された場合)の手続きと方法

これから述べる2つの実験の順序は論理的必然に従つたものではなく、思いついたままの順序である。時間的に先に思いつかれ、こころみられた実験から説明していくことにする。

われわれは、まず第1に、互にまったくみしらぬものばかりが、同一のはじめての空間の中に、同時におかれている場合、それらの人たちはどのように行動するか、そのような「互にみしらぬ人ばかり」によつて特徴づけられた不馴れな空間がどのような経過をたどつて馴れた空間に転化していくのであるか、そして、より直接的には、そのような場面の中での互にみしらぬもの同士の間相互に対する反応がどのように変化していくのか、を実験的に検討してみた。

この実験の Vp. には5名の小学4年生をえらんだ。

本論文の前半の要点は、すでに日本心理学会第19回大会で発表されており、塚田(3)によつても紹介されている。以来数年を経過しており、今になつて本稿を発表するのにはいささかちうちよを感じないでもない。しかし、本考察は、わたくしのこの方面における研究の必須の1段階であつた……とわたくしは思うしまた本考察の後半は未発表のものである。おくれげながら、あえて本論稿を発表させていただく理由はそこにある。

* On the familiarity of behavioral space : II.
——Social interaction of strangers——

** by Miyakawa, Tomoaki (Tohoku University)

このことには特別な意味があるわけではない。いかなる発達段階に属する人を Vp. にえらんだにしても、われわれの目的は達したであろう。しいていえば、みしらぬ他人をそれとして認知することができ、その存在が不馴れな空間を生起せしめうるようなそういう発達段階に達している人たちならば、だれを Vp. にえらぼうとかまわないのである。もちろん、個々の具体的な点では、Vp. の属する発達段階の特徴があらわれるであろうが、不馴れな空間が馴れた空間に転化する過程の根底には、共通の根本的特徴があることが、前回の考察からも期待されてさしつかえあるまい。それにしても、いちおう自他の分化が生じかつ他との共同的製作活動ができるようになるのは、川口(1)も証明するように、ギャング・エイジからのことであろうし、また他方、この実験の目的を達成するには、成人に比べて条件の比較的単純な児童を Vp. にえらぶ方が操作は容易であろう。そして結局、学童を Vp. にえらべば、「互にまったくみしらぬもの」を集めやすいのである。小学4年生から Vp. をえらんだことの理由をいってさがせば、以上のようなことが考えられるし、なによりも、Vp. の発達段階を「小学4年」で統一することも便利である。

仙台市東二番丁、東六番丁、片平丁、荒町それに大学附属の各小学校の4年生から、各担任教師にえらんでもらった1名の Vp. (学業成績がクラスで中位のものから任意にえらんでもらった)を、それぞれ途中で互に遭遇しないように実験室につれてくる。もちろん、1名の Vp. にはかならず1名の定められた「つきそい」がついており、このつきそいが実験期間中その Vp. の送り迎えから実験中のその行動の観察にいたるまで、その Vp. についての一切の責任を負うのである。5人の Vp. は一斉に同時に実験室に入れられ、着席させられるが、それまではできうるかぎり互に隔離されている。なお、各 Vp. はそれぞれの担任教師やつきそいから、テストをうけるために大学の研究室に毎日通うことになったときかされている。

実験室の条件は Fig. 1 のとおりである。5人の Vp. はアトランダムに Fig. 1 のような配置で着席する。この Vp. たちには、1954年6月22日、23日、24日と3回にわたって実験室に来てもらったが、毎回各 Vp. の着席位置の関係はアトランダムに変更されて、一定しないように配慮された。そして各 Vp. は、テストの準備が完

* 発達段階によってファミリーリティの形成過程がどのように異ってくるかという問題もたしかに研究されねばならない残された課題であることはいうまでもない。

Fig. 1

了するまでその位置で待っているように各つきそいによって命ぜられた。

各つきそいは、Vp. が着席し終ると、できるだけじん速にそれぞれの観察位置に着席し (Fig. 1 の Be. は各つきそいの観察位置を示す、以後つきそいを Be. とよぶ)、実験指揮者 Vf. の「観察はじめ」の合図とともに、各自担当の Vp. の行動を、あらかじめ定められた形式にしたがって、観察し記録する。別に秒よみ係り U がいて、観察はじめから10秒ごとに時間の経過を Be. および Vf. につたえる。そして Vf. は実験の全体的経過を観察する。観察時間は10分。10分の観察時間が経過すると、ただちに Vf. は観察やめを合図する。そして5人の Vp. はただちに別の実験室にみちびかれ、そこで5人一しに各種のテストをうける。これらのテストが終了すると、各 Vp. はそれぞれの Be. にともなわれて帰宅する。もちろん、各 Vp. を互にできるだけ隔離しておくためである。なお、実験中に Vp. たちのかわす会話を録音するように、かくしマイクが配置され、Vf. が操作するテープレコーダーにみちびかれてあった。そして U の秒よみもテープに録音されて、Vp. たちの会話の時間的位置がかわるように配慮されていた。

このような実験的観察は先にも述べたように3日にわたって、つまり3回こころみられた。この実験回数については、あるいは少なすぎるという批判がおこるかもしれない。しかし、多数回同様の観察が重ねられたにしても、この種の実験にあつては、かえって余計な条件が錯綜してきて、結果を不純ならしめ、解釈を困難にするお

それなしとしない。結果論ではあるが、むしろこのように観察回数を3回にとどめたことが、社会的馴れの成立過程を実験的に解明していくのに好都合であったのではなかろうか。

3. 実験1の結果およびその考察(その1)

ともかく、5人のBe.が各自担当のVp.について観察記録した結果の要点はTable 1からTable 6までにまとめることができた。Table 1は、3回にわたる観察において、各Vp.の物に対する行動として判定されたもの(①対象に視線をむける、②対象に歩みよる、③手でふれる等の諸行動を含むが、①が大部分である。)の各回における生起度数を対象別に示したものであり、Table 2は、各Vp.の人に対する行動の毎回の生起度数を行動様式別に示すものである。そして、Table 3は歩きまわる行動の生起度数を示す。なお各Table中の()の中の数値は、その行動に属する最初のもの生起が、その回の観察開始時より何秒後に観察されたかを示すものである。たとえば、Table 1 Vp. Aの実験回数I、行動方向が鏡である欄に、7(70)とあれば、Vp. Aは第1回の観察時中に一方視鏡にむかつて7度視線をむけたのであり、かつ当該行動の生起は、その時の観察開始時より70秒後にはじめて観察されたことを示している。

これらの3個のTableが意味していることを総括するなら、次のようにいえよう。まず第1回の観察では、最初はVp.たちは互にぬすみみただけで相互に、はなしあうことはもちろんのこと、視線をかわすことさえもはば

かっている。そして、かれらの視線は主として空間の人以外の部分(物)にそそがれている。しかし、実験第1回の終りに近づくと、視線の交換はもちろんのこと、会話もやや活発にかわされるようになってくる。実験第2回では、実験室に入れられた最初の瞬間から、Vp.たちは互に視線をかわし、はなしあう。そして、3回の実験観察を通じてもっとも活発な対人交渉が展開する。しかし、物の世界が行動の対象になることは前日に比べていちじるしく減少する。以後、物の世界に対する反応度数は前回の考察(2)からみてほぼこの水準で安定すると考えてよからう。実験第3日になると、物の世界に対する反応度数はいま述べたように2日目の水準にとどまっているが対人行動の生起度数も2日目のような高い水準には達しにくくなる。しかし、実験初日に比べればそれでもなお、より活発であることは否定できまい。なお各Vp.が最初の実験のときよりも第2、3回目により活発に歩きまわるようになることはTable 3に示すとおりである。

では、なぜこのような経過が生じたのであろうか。前回の考察ではVp.はただ物だけが問題になるような空間の中に入れられた。そこでは、空間の馴れの成立とはVp.のモチヴェーションの構造とその内容に即応した空間の認知的構造化が成立して、いろんな事物のもつ意味や役割が定まってくることであり、この事実には外面的には単位時間内における行動延数や行動方向数(行動対象数)の減少が描く曲線が対応することがあきらかにされた。そしてこの対応は、はじめ不馴れな空間では未分化な探索的行動が多方向に生ずるが、後に空間が構造

Table 1 物に対する行動

実験回数 行動方向																
		I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III			
鏡 窓 天井 床 壁 その他 計	Vp. A の 場 合	7 (70)	1 (240)	8 (0)	Vp. B の 場 合	18 (0)	16 (40)	17 (120)	Vp. C の 場 合	0	2 (240)	1 (20)	Vp. D の 場 合	9 (10)	8 (200)	6 (120)
		19 (0)	4 (320)	11 (20)		13 (0)	1 (0)	7 (10)		9 (60)	3 (0)	4 (190)		14 (60)	6 (240)	14 (0)
		0	0	1 (24)		1 (280)	0	1 (230)		3 (0)	0	0		4 (20)	0	0
		0	1 (0)	3 (10)		8 (90)	3 (250)	10 (440)		4 (10)	1 (430)	1 (560)		8 (0)	4 (0)	3 (230)
		1 (60)	5 (140)	4		4 (40)	5 (0)	3 (210)		3 (180)	3 (330)	2 (340)		8 (110)	2 (0)	2 (580)
		5 (10)	3			⋮	⋮	⋮		⋮	⋮	⋮		⋮	⋮	⋮
計		32	14	27		44	25	28		19	9	8		43	20	25
		Vp. E の 場 合	(人以外のものに対する行動総数)													
			I	II	III											
			31	22	20											

Table 2 人に対する行動

Vp.	行動方向	特定個人に対する行動			全員にむけられた行動		
	実験回数	I	II	III	I	II	III
	行動様式						
A	① 視線をむける	25 (250)	58 (20)	39 (0)	2	1	0
	② 話しかける	22 (160)	17 (50)	19 (70)	0	0	2
	計	47	75	58	2	1	2
	総計				49	76	60
B	① 視線をむける	66 (70)	94 (10)	89 (0)	0	10	15
	② 話しかける	0	10 (10)	21 (20)	0	0	6
	計	66	104	110	0	10	21
	総計				66	114	131
C	① 視線をむける	52 (10)	54 (0)	47 (20)	1	4	7
	② 話しかける	18 (40)	24 (0)	22 (30)	0	1	3
	計	70	78	69	1	5	10
	総計				71	83	79
D	① 視線をむける	50 (0)	85 (0)	66 (0)	1	0	0
	② 話しかける	14 (320)	35 (0)	19 (0)	0	3	7
	計	64	120	85	1	3	7
	総計				65	123	92
E	① 視線をむける	13 (0)	66 (0)	48 (10)			
	② 話しかける	18 (40)	9 (350)	34 (10)			
	計	31	75	82			
	総計						

注 総計は特定個人に対する行動と全員にむけられた行動の総和である。

Table 3 歩きまわる行動

実験回数	I	II	III
Vp.			
A	3	4	7
B	6	11	9
C	6	13	21
D	0	5	5
E	6	15	10

化して馴れた空間になると、比較的に方向の分化し独立した(安定した)行動が生起するようになることによると説明された。今回の実験の場合も、各 Vp. の物の世界に対する行動数に関するかぎり、まさに同じような減

衰曲線が成立する。しかれば、今回の実験においても、物に対する Vp. たちの行動には前回と同じような説明が当てはまるであろうか。たしかに幾分かはそうであろう。しかし、今回の物に対する Vp. の行動の場合にはもっと別の要因も考慮されねばなるまい。

みしらぬ部屋に、みしらぬ他人といっしょに初めてはいったとき、おそらくしばらくは、部屋の中の物も、いや部屋全体も、そして他人も、同じ程度に“みしらぬ”ものであり、不馴れた存在であろう。それらは同じ程度に探索的関心の対象となるであろう。しかし、みしらぬ生きものの方が、みしらぬ生命なきものよりも、もっといきいきとした圧力を人に及ぼすはずである。そこで、まもなく部屋全体が、そして部屋の中の物が、みしらぬ

生きものからの逃避のための道具、避難所になる。Vp. たちは互に他から眼をそらし、やり場に困った視線の救いの場所を部屋の中のいろいろな物や部分に求める——物の世界は人の世界からの逃避の場所になりやすい、したがって古来多くの人たちが自然や芸術に親しんで世俗を去ったのではないか——。かくて物の世界がただ単にみしらぬ初めてのものであったばかりでなく、人の世界からの逃避の場所としての性格をすばやく獲得したこと*が、実験の初日における対物行動のひん数を多からしめたといえる。ところで、実験第2日以後は、物の世界については、前回の考察で述べたと同様なことが今回も生起してゆき、のみならずこの世界は対人交渉のための道具や手段あるいは目標になっていったと考えられる。そして実験2日目以後は対物行動は半減してこの水準に安定するようになるのである。

さて、物という避難所の成立は、対人行動の側からみれば、ここを根拠地として生きものであり精神をもつがゆえに難物であるみしらぬ他人をなんとかして速く理解し把握しようとする意図を支持する基盤の実現をも意味する。したがって恐る恐る他人へむけられる Vp. たちの視線はこの他人と物との間をだんだんとひんはんに往復するようになる。まさにこれと同じことが前回の論文の「空間の馴れの破壊」の項で述べた実験においても生起している。一度成立した馴れた空間の中に「みしらぬおとな」をいれておくと、子どもたち(Vp.)の視線はこのおとなと事物との間をしきりに振子運動的に往復する。前回の考察では、この現象は、Vp. たちに異常な情緒的緊張が発生したことによると説明された。たしかにそのような事実も随伴したであろう。しかしそのほかにいまいち述べたような、みしらぬ他人を探索しようとする要求と馴れた物の世界への逃避とがこの現象の根幹をなしていたであろうことを前回の考察は見のがしていた。話をもとにもどそう。ともかく5人のVp. は互に他をチラリと検討しはじめる……しかし、そのときすでにひとつの共通な疑問が5人の Vp. の頭の中を支配しているか、もしくは支配するに足りる十分な条件がととのっている。“おれたちはいったいこれからどんなことをさせられるんだろう。”しかし、まだまだお互いにみしらぬ他人を知らねばならない。お互いのぬすみ見はまだしばらくつづく。だが、“おれたちはいったい……”という恐怖とも好奇心ともつかない疑問にたえられなくなった1人の子どもがこの疑問を突然明りようかつ率直にどな

るようにあるいは悲しむように表明する。5人のVp. たちはとっさに自分たちが共通の運命のとりこになっているなかまであることを理解し、共感し、認知する。こうしてお互いの疎遠感は急激に親近感にかわり、5人の間に一時にどっと会話がもりあがって部屋の中の沈うつな気分は一ぺんにふきとばされ、明るいにぎやかな雰囲気になる。かくて対人関係の馴れの第1段階が成立する*。

しかし、たとえ同じ運命を共有するにしても、その共通運命の中で、互いに親類できるやつなのか、敵なのか味方なのか、あるいはどいつが気に入らぬやつで、だれが気のおけない相手なのか……等々がもつとはつきりしなければならない。いいかえれば、大きな上位の共通運命の認知に結ばれたこの集団成員は、さらに下位共通運命の発見によって下位集団に分裂しようとするのである。かくて、互にメスをいれて相手を解剖し、その正体をつかもうとする探りあいが上位共通運命の認知の成立とともにおおびらになり、さかんになって、実験第2日にはこの探りあいを主軸とした最もさかんな対人交渉が展開することになる。すなわち、第2段階のより安定した馴れの成立をめざして、ひきつづきより積極的なあらたな探索がはじまるといえる。

結局、みしらぬ人が不馴れた空間の主たる要因になっている場合でも、不馴れた空間が物だけから成立している場合と本質的には同じことが生起しているといえる。みしらぬ他人に対しても、まず探索行動が生じる。ただ相手が生きものであり内側に精神をもった「人」であるがゆえに、探索を拒むような抵抗がかれらから波及してきて（特に他人の眼はこの抵抗のみなもとである）探索を遅延せしめる。そうして、この抵抗は共通運命の認知の成立つまり第1段階の馴れの成立によってその力を減ずるのであるが、他人の測りしれない内面、力動的な存在としての他人は、さらにひきつづいてより長時間の積極的な探索を必要ならしめるのである。しかし、適当な探索ののちは、ちょうど、物だけからなるみしらぬ空間が、人のモチィヴェィションの構造とその内容に応じて、認知的に構造化し、その空間の中のある物やある部分が他の物や他の部分に対して特に重みをもつようになったように、みしらぬ他人の群もやはり自分のモチィヴェィションに即応して認知的に構造化する。ある他人は自分にとって重要な存在になり、他は周辺的な、ないし

* くわしくいえば実験室全体が、人の世界と物の世界に分化し、構造化して、後者が前者からの逃避の場所という性格を獲得したこと。

* 共通運命の認知は集団の団結の基礎である。いわゆる「勤務評定」はたしかに教師の側におけるこの認知をくずすことに役立つであろう。なお「共通運命の認知」といってもそれはもちろん主観の問題であることは断わるまでもあるまい。

異質的な存在になる。ひとりひとりの他人に対して、それぞれの扱い方、遇し方、対処の仕方が区別され、定まってくる。これが対人関係における馴れの成立の第2段階である。こうして、対人行動は、実験第3日にはそれが萎縮していた初日より多くてさかんであるにしても、2日目に比べて減少の方向をとるようになると考えられる。もっとも、この傾向を示したのは5人のVp.のうちA、C、Dの3人で、他の2人は初日より2日目、2日目よりは3日目においてより多くの対人行動を示している。このように全Vp.に一樣な結果がみられなかったのは、人というものがやはり精神的存在であるという特性をもち、かつ物よりも力動的な、変化しやすい存在であるがゆえに、探索しにくいものであると同時に、よく気心の知れた相手でも常にながしかの探索と監視を加える必要があるからであろう。今日までよい人だと思われていた相手でも、突然悪人にみえたり、不可解な未知の人にみえたりすることはわれわれのしばしば経験するところである。しかしともかく、もしわれわれがもっと実験を延長していったならば、そして他の異種条件が加わりさえしなければ、すべてのVp.が安定した対人関係に到達しえたであろうと推定することを拒む理由はないのである。

ともかく、われわれの3回にわたる実験においてえられた対物行動や対人行動の経過曲線は以上のような意味をもつであろう。そして各Vp.の歩行の増加も、こうした馴れの程度に依存する従属変数の一つであると考えられる。

このようにみえてくると、幼稚園や小学校における新しいクラスにおいても、対人行動の急激な増加とそれに伴う騒がしさの急増は、まさに共通運命の認知(第1段階の馴れの成立)を基底とした探索行動の積極化であり、それにつづく対人行動のある程度のおちつきは第2段階の馴れの成立によると説明することができよう。

なお今回の実験では、物の部分についても、また他人に関して、不馴れであるような空間で実験が開始されたのであるが、少なくとも空間の物の部分に関する馴れが成立したのちに、みしらぬ他人をその中にいれることによつて不馴れな空間を作り出す方法をとった方が、対人関係の馴れの成立過程をより純粋化しえたのではないか、という疑問が残る。しかし、われわれはすでにこのような手続きを先に述べた馴れの破壊に関する実験で試みている。このような手続きを用いれば、たしかに主としてみしらぬ他人についての探索がはじめてから生起し、すでに馴れの成立している物の部分がもっぱらこの他人からの逃避の場所になることは既述のとおりなのであ

る。

さてわれわれは、以上のように対人関係の馴れの成立過程も物のみからなる空間における馴れの成立過程とともに根本的には(空間の)認知的構造化という一つの特徴を共有することを見いだしたのであるが、しかし、精神をもった人そのものが力学的に不安定であるがゆえにしたがってこの人を含む空間全体も力動的流動的であるがゆえに、人相互の間の馴れの成立は上述のような2段階にわたって発展する可能性があると考えられるのである。そして、なお実験回数を延長していったならば、集団の内外条件や成員各自のいろいろな条件によって、さらに対人関係の認知的構造ないし馴れそのものに変転があったろうことは否めない。それにしても、上述のような2段階をなす馴れの発展が基本をなすものであり、その後の変転があったにしてもそれは本質的には第2段階の延長の変転にすぎないであろう。いずれにしても、人間の集団はまとまりにくくまた分裂しやすく不安定なのである。

4. 実験1の結果およびその考察(その2)

Table 4は各回の実験において各Vp.が他のVp.たちの視線をうけた度数と他のVp.たちに視線をむけた度数の比を示し、Table 5は各Vp.が他のVp.たちからはなしかけられた度数と他のVp.たちにはなしかけた度数の比を示す。なおTable中の分数の分子は他の視線をうけた度数もしくは他からはなしかけられた度数であり、分母は他に視線をむけた度数もしくは他にはなしかけた度数である。(1人のVp.が他のVp.全部を見まわした場合もしくは他のVp.全部にはなしかけた場合は、その行為を行なったVp.については1回の対人行動——視線をむけるとか、はなしかけるとか——を行なったものとして計算し、この視線をうけたVp.全員もしくははなしかけられたVp.全員については、これら各Vp.は $\frac{1}{n-1}$ 回だけ他者からそれらの行為をうけたとして計算した。ただし、nはVp.の総数であつて、n=5である。)

以上の2つのTableからは、他人をみたり他人にはなしかけたりする割に他からみられたりはなしかけられたりすることの少ないものと、多いものがあることがわかる。たとえばVp. EやVp. Aでは、はなしかけられたり、みつめられたりする回数とその反対の場合の回数より多い傾向がみられるし、Vp. BやVp. CではVp. EやAとは全く逆の傾向がめだつ。こういう現象は一体どのような意味をもつものか、いまだ少し分析をすすめてみよう。

毎回の実験において、5人のVp.相互の間に対人行

動が幾度かわされたか、その関係をみてみると Table 6 のようになる。(ここでははなしかける行動と視線をむける行動とを一括して扱うことにする。はなしかける行動の度数は視線をむける行動の度数より少ないから、このように扱っても、視線をむける行動のみを単独に処理する場合に比べて結果には大きな変動は生じないことをたしかめた。また、はなしかける行動のみを単独に処理しても生起度数が少ないため、解釈に困ることもある。) Table 6 で I の列の A : B の欄で 9.5 : 15.0 とあるのは実験第 1 日に A は B に対し 9.5 回の対人行動を行なったのに対し、B は A に対し 15.0 回の対人行動を行なったということを示す。いまこのようにみていくと、各実験日ごとに、各 Vp. が他の Vp. 1 人あてにだいたい何回の対人行動を行なったか、その平均値 $\bar{x}$ と σ とを算出することもできる。

さて、この Table 6 から、毎回の実験において、A, B, C, D, E 5 人の Vp. の間にどのような関係があったかを推定してみたのが Fig. 2 である。Figure 中の——は 2 者の間に対等の関係があったことを示し、——は 2 者の関係が弱い 1 方向性をもっていたことを示すもので、たとえば B——A はどちらかといえば B が A を指向し、A に依存する傾向がみられたことを示す。——は強度の 1 方向的関係があったことを示すもので、B——A は B が強く A を指向し、A に依存していたことを示す。(以上の推定は次のようにしてなされた。2 人の Vp. 相互の間にかわされた対人行動の度数の差が 1 シグマより大であれば、両者の間には強い 1 方向的関係があるとした。すなわち 2 名の Vp. のうちより多く他方に対して対人行動を行なった Vp. がそうでない Vp. を強く指向していたものとみなされた。同様に、2 人の Vp. 相互の間の対人行動の度数の差が $\frac{1}{2}$ シグマより大で 1 シグマより小である場合は、両者の間に弱い 1 方向性があるものとみなされた。そして、2 人の Vp. 相互の間の対人行動の度数の差が $\frac{1}{2}$ シグマより小であれば両者の間の関係は対等のものとして処理された。*)

結局、Table 4, 5, 6 および Fig. 2 は、じつは、対人関係の馴れの成立にはリーダーがあったことを語っているのである。実験第 1 日においてこのリーダーの役を果た

Fig. 2

したのは Vp. E であった。「おれたちはこれからいったいどんなことをさせられるんだろう。」というあの共通運命の認知をまつ先に口にしたのはこの E であったのであり、そしてまさにこの率先した共通運命の認知の表明のゆえにかれは同席の他の子どもたちの信望と期待を集めるに十分な位置を先取りし、馴れの成立の第 1 段階においてリーダーの役を果たしたといえる。そのうえ、かれの行動には衆目を集めるに足る一種の奇きようさと突飛さ、大胆不敵さ、無作法がそなわっていたのである。かれだけが指定された自席を離れて実験室の中の壁や鏡やその他いろいろな部分を手あたりしだいに触れて歩いた。しかし、かれのこのなみはずれた無作法さは他の注目をあびると同時に、やがて、批判のまともになる。この批判者の役割をまさきを買ってでたのが Vp. A であった。かれは「おちつきのある、重厚な感じのする、子どもであった。かれは、仲間の他の Vp. のところへ歩いていくことはあっても、実験室の中のいろんな部分に触れて歩くようなことはしなかった。かれは E がブラブラする無作法さを「あいつよく動いて歩くな。そんなことをしていると先生から叱られるゾ」と指摘した。この指摘は他の子どもたちの共感を買ひ、みなワフワフ笑った。つまり、Vp. A は下位共通運命を認知し、それを表明した最初存在であったのである。このようにして、Vp. E のリーダーとしての地位は危うくなる。実験第 2 日には少なくとも E と A とは対等に近い関係に立つ。そして 3 日目には、E も A に従う傾向すら示したのである。ともかく実験第 1 日には、5 人の Vp. の間には、E を頂点とした明りような位階関係が成立したのであるが、第 2 日からはこの位階は E, A 2 つの頂点にくずれるきざしがあらわれ、3 日目には位階の頂点は A へ移行する傾向さえ示されるのである。つまり、A は第 2 段階の馴れの成立過程においてリーダーの役を果たしつつあるわけである。そしてその間にあって、B や C はいつも下づみ存在に終始する。Table 4, 5 および 6, それに Fig. 2 は、以上の事実と即応するのである。

われわれは次のように推論することが許されよう。

①対人関係の馴れが成立するためには、(その第 1 段

* 以上のような処理法はあまりに便宜的で統計学的には許されないことかもしれない。しかし、心理学の場合量的処理法が先行するよりは、むしろ質的な結果を量的処理に先行さすべき必要があることがしばしばではなからうか。なお、後にもみるように、われわれのといった推定法は、Vp. たちの間にかわされた会話の内容によってもうらづけられることができよう。

階においてもまた第2段階においても)リーダーがある

②リーダーとは、その集団の他の成員たちによってうけいられる「共通運命の認知」を率先して表明する人である。したがって、その人の表明する認知内容をうけいれる集団の成員の数と彼らの受けいれの深さ(共鳴の程度)によって、その人のその集団内の地位が決定される。

③その集団の他の成員たちに自分が視線をむけたり、はなしかけたりする度数よりも、他の成員たちから視線をうけたり、はなしかけられたりする度数の多いものは、その集団内における地位が高く、その最高に位置するものがリーダーである。

④対人関係の馴れの構造は、つぎつぎに生ずる「共通運命」の表明によって変動しやすい。

5. 実験2(すでに馴れの成立している集団の中へ1人の新人——ニューフェイス——が参加した場合)の手続き・方法について、

それでは、すでに馴れの成立している集団の中へ、1名の新たな加入者がある場合はどのような現象が生ずるであろうか。

仙台東二番丁小学校4年生の同一クラスからA', B', C', D'の4名のVp.)クラスにおける彼らの座席は互に接近していて、かれらの間にはすでにある程度の馴れが成立していると考えられる),荒町小学校4年生から1名のVp. E'をえらび、これら5名のVp.を、5日にわたって5回、実験室に招いた。東二小の4名は一しよに同時に実験室に迎えられたが、途中でVp. E'と接触しないように配慮されたし、もちろん実験室からの帰宅のさいも同様に注意が払われた。実験1のときと同様に、かれら5名は大学の研究室でテストを受けることを担任教師からきかされていた。そのほか、Vp. 1名につき1名の観察者Be.があったことなど、実験の手続きや方法は実験1の場合とすべて同じであったが、ただ対人関係の馴れが問題になる前に実験室そのもの(もしくは物の世界)に対する馴れが成立してしまっているように留意されたことが実験1と大きく異なる点であった。すなわち、実験第1日と第2日には、A', B', C', D'の4名のグループに対する実験観察とVp. E'ひとりに対する実験観察とを実施時間をずらして別個に実施して、グループにとってもまたE'ひとりにとっても実験室に対する馴れがまず成立してしまうようにし、実験第3日からはじめて5人のVp.をいっしょに同時に実験室に入れることによって、対人関係の不馴れだけができるだけ純粋な形で抽出されるように配慮された。ただ残念なことには、この実験の進行中、3日目にVp. B'が感冒のため実験室にあ

らわれなかったし、また実験の不手ざわのため、必ずしも十分な観察結果をえられなかったことをお断りしておかねばならない。

6. 実験2の結果とその考察

本実験の結果も、今までの諸実験と同じような角度から整理し、考察できないことはない。そのように整理してみると、その結果は一見必ずしもいままで見いだされた法則どおりではないようにみえるのであるが、その場合いつでも異種条件の混入を考えうるし、結局は本実験におけるすべての事象も法則どおりに運んでいることを証明しようと思われる。しかし、これらの詳細をかかげることは省略する。

本節であきらかにすべき本質的な問題は、ひとりのニューフェイスを既成のグループがどのようにして受けいれていったか、あるいはひとりの新人がみしらぬ4人のグループにどのようにして参加していったか、ということである。いいかえれば、ひとりの新人がみしらぬグループにどのようにして馴れていったか、もしくは逆に、4人のグループがみしらぬ1名の新人にどのようにして馴れていったか、という問題の解明こそ本節の目的なのである。いま、もっぱらこの目的にそって結果を整理し考察を加えることにする。

Table 4

実験回数 Vp.	I	II	III
A	1.57 42.5/27	1.42 83.5/59	1.65 64.5/39
B	0.35 23/66	0.49 51.3/104	0.42 43.8/104
C	0.75 39.8/53	1.14 65.8/58	0.96 51.8/54
D	1.07 54.8/51	0.90 76.8/85	0.73 48.5/66
E	3.85 50/13	1.44 94.8/66	2.14 102.5/48

Table 5

実験回数 Vp.	I	II	III
A	0.41 9/22	1.41 24/17	1.65 34.8/21
B	3/0	2.30 23/10	0.77 20.8/27
C	1.06 19/18	0.27 6.8/25	0.66 16.5/25
D	1.36 19/14	0.64 24.3/38	1.17 30.5/26
E	1.22 22/18	2.33 21/9	0.90 30.5/34

Table 6

実験回数 Vp : Vp	I	II	III
A : B	9.5 : 15	28.25 : 28.5	14.5 : 36.25
A : C	13.5 : 18.25	20.25 : 21.25	9.5 : 17.5
A : D	10.5 : 12.25	7.25 : 33.75	17.5 : 19.75
A : E	15.5 : 6	20.25 : 24	18.5 : 25.75
B : C	15 : 3.25	20.5 : 13.25	17.25 : 19.5
B : D	32 : 11.25	38.5 : 26.75	28.25 : 16.75
B : E	4 : 2	26.5 : 6	49.25 : 13.75
C : D	17.25 : 21.25	19.25 : 22.75	14.5 : 17.75
C : E	32.25 : 9	29.25 : 9	27.5 : 23.75
D : E	20.25 : 14	39.75 : 36	37.75 : 18.75
	$\bar{x}=14.1 \sigma=8.18$	$\bar{x}=23.55 \sigma=9.7$	$\bar{x}=22.2 \sigma=9.62$

Table 7 Vp. E' の対人行動

Vp. E'	実験回数	特定個人に対する行動			全員にむけられた行動		
		III	IV	V	III	IV	V
	行動様式						
	視線をむける	7	25	31	11	2	4
	話しかける	1	0	3	0	0	0
	計	8	25	34	11	2	4
	総 計				19	27	38

註 総計は特定個人に対する行動と全員にむけられた行動の総和である。

Table 8 Vp. E' にむけられた行動

Vp.	実験回数 行動様式	III	IV	V
Vp. B'	視線をむける		2	10
	話しかける		0	2
	計		2	12
Vp. C'	視線をむける	0	1	13
	話しかける	1	0	4
	計	1	1	17
Vp. D'	視線をむける		6	6
	話しかける		0	1
	計		6	7
Vp. A'	視線をむける	4	3	5
	話しかける	0	0	1
	計	4	3	6

Table 7は、Vp. E'が4人のグループといっしょにされてから(実験第3日以後)このグループに対してどのように反応したかを示すし、Table 8は Vp. A', B', C', D'の各々がE'に対しどのように反応したかを示す。ただし、先にも断っておいたように、B' は実験第3日

Table 9

Vp. E'の他 Vp. に対する行動			
実験回数 対 象	III	IV	V
A'	2	3	7 (1)
B'	:	13	10
C'	5 (1)	8	10 (1)
D'	1	1	6 (1)

註：()の数は話しかけの数

(Vp. E'が4人のグループに加わった最初の日)に欠席したので、該当の欄は空欄にしたし、また実験の不手ぎわから、Vp. D'の実験第3日の資料もかかげることができない。

しかしそれでも、Table 7と8とからは次のように考えてもさしつかえあるまい。

①実験第5日、つまり既成のグループに1名の新人が加わるようになってから3日目に、新人は他の4人のグループにより積極的に接近しようとする

ようになったし、4人のグループも新人により積極的に接するうごきを示した。この現象の根底には、新人の側にもまたグループの側にもともに共通運命の認知の成立があったであろう。

②互に馴れあっている成員からなる既成のグループの中に、このグループの成員数よりはるかに少数の異質の新人が加わるときは、この新人は既成の成員に対して、既成の成員がこの新人に対して行なうよりもよりさかんな探索的行動を行なうであろう。そしてこの新人は比較的強い緊張におちいるであろう。

さらに、Vp. E'が他の4人のVp.の各々にどのように反応したかを分析してみるとTable 9をうる。E'が他の4人のVp.のうち特にだれに大きな関心をもったかは、これだけの資料からは十分にはあきらかではないにしても、C'に対して比較的強い関心をもったであろうことが、Table 9の全体からも推定される。つまり、

③新人が既成のみしらぬ集団の中に加えられこれに馴れていく場合にも、かれのモチベーションに即応して、みしらぬ他人たちが新人にとって認知的に構造化していく過程——つまりだれがより好ましいかということの認知成立の過程——が、その根底に存在していると

考えられる。こうして、

④新人が既成集団に馴れていく場合も、実験1の場合と同じように、共通運命の認知の成立過程と対人関係の(認知的)構造化の過程が伏在しているといえる。

そうして他方、さらに Table 8 をみると、実験5日目つまり E' が4人のグループに投入されて3日目には、Vp. C' が E' に対し積極的な関心をもっていることが察知される。Vp. C' は、実験最終日に、かれのもとからの仲間のだれが行なうよりも一番多く E' にはなしかけ、かつ視線をそそぐのである。すなわち、E' と C' の双方の間に、互に対する比較的高い関心が生まれたといえそうである。E' の C' に対する関心はいわばむくいられたというべきであろう。このことからわれわれはさらにひとつの重要な命題を導きだすことができる。

⑤新人が、ひとつの既成集団に馴れていく場合(いいかえればその集団の成員として迎え入れられる場合)、それは、この新人に積極的関心をもち、かつ新人もかれに対して積極的関心をもつであろう1名もしくは若干名の既成成員との馴れ(結びつき)の成立を礎点ないし契機として行なわれるであろう、と。逆に、既成集団はそのような既成成員を媒介として新人をむかえいれるともいえる。

ところで、E' がかれに対し関心をもち、また E' のその関心に対してこたえて、新人の E' がグループに参加するための結節点となった C' とは、いったい既成グループの中でどのような地位を占める存在であったろうか。資料が不十分なため、この点をあきらかにしえないことはまことに残念であるが、この問題に対しては、C' はかれら4人の既成グループのリーダーではなかったにしても最下位に位するものではなかったことは確かであるとだけいっておこう。

7. 今後の問題

それならばいかなる問題が今後に残されているであろうか。まず第一に、われわれの行なった実験の系列が余りにも数少く、しかもいわんとするところがあまりにも多くすぎることを警告したくなる人が多いであろう。もちろん、われわれもそのことを痛感している。またもっといろんな条件のもとでの実験も行なってみるべきであろう。しかし、いくつかの異なる小学校から1名ずつの生徒を途中で互に遭遇しないように集めて来て、上述の

ような実験を数日にわたってくりかえすことは、いいやすくして実現しにくいことを、われわれは身をもって体験してきた。現場の教師のかたがたにこの種の実験の意義を理解してもらい、持続的な援助を仰ぐことも容易ではないし、また感冒の流行やその他のちょっとした事故が、われわれの実験室から大切な Vp. を簡単にうばい去ってしまうのである。もうそれでその日まで苦勞してきた実験はなかばオジャンになってしまう。われわれが最少の実験で最多のことをいわねばならなかった理由はそこにある。

行動空間の馴れの成立についての原理的考察はこのあたりでとどめておこう。われわれは次の機会には、現実の学校で、また現実の職場で、いかに馴れが成立していくかをみてみようと思う。いや、ひとりひとりの人間がどのようにしてその人生におちつきと馴れとを見いだしていくものか、この点に関する研究をすでに樋口伸吾氏とともにすすめてつづけることを報告して、この稿をおわる次第である。なお最後に、東二番丁、片平丁、東六番丁、荒町、東北大附属の各小学校のみなさまに、それから本実験を手伝ってくださった東北大教育心理学教室の第3回、第4回の卒業生のみなさんに、心から御礼申し上げる次第である*。

文 献

- (1) 川口勇：児童画の集団製作に関する研究—協同性の発達と集団雰囲気との関係—教育心理学研究, 1956, 3, 214—220.
- (2) 宮川知彰：行動空間の馴れについて。教育心理学研究, 1953, 1, 39—47.
- (3) 塚田毅：家庭・学級・地域社会。(矢田部・園原編「現代心理学の展望」1957, p. 280)

(1959年10月30日 原稿受付)

* なお先にも断ったようにいろいろな発達段階を異にする Vp. について、この種の実験をこころみて各段階の特徴をあきらかにすると同時に、それによってまたこの種の実験を社会性の発達に関するテストにまで成長させることができるように思われる。またわれわれのとった方法の信頼性について疑問をもたれる方があろう。たしかにこれは大きな問題であろうが、5人の観察者からえた結果相互の間に大きな矛盾やソゴがなかったということが、信頼性の一つのきめ手にはならないであろうか。

ON THE FAMILIARITY OF BEHAVIORAL SPACE : II

—Social Interaction of Strangers—

by

Miyakawa, Tomoaki

Tohoku University

The following experiments were conducted to investigate how acquaintance with strangers is formed.

The Procedure and Method of Experiment I :

Five children in the 4th year of primary school who were strangers to each other were called into a room together and left by themselves for 10 minutes. The behaviors they showed toward each other were observed individually through a oneway mirror by 5 observers. Before they were called into the room each subject was instructed that he would be given various kinds of psychological tests and that he would be kept waiting a few minutes till the arrangements for testing were completed. After the 10 minutes of planned observation, a small test was actually given to the subjects in another room to make them believe that the instruction was observed. During the observation period, each observer recorded (1) the frequency with which one subject looked at each other subject, (2) talked to others, (3) parts of the room seen by him, and (4) parts of the room touched with his fingers. The conversation among the subjects was recorded by a tape-recorder through a microphone on the wall. Besides the 5 observers, the conductor of the experiment (CE), and the person reading seconds (W), all worked together. The W informed the CE and each observer the passing time every 10 seconds throughout the experiment. The announced seconds were also recorded by the tape-recorder. The CE gave needed instructions such as starting and stopping the observation. The experimental observations were carried out 3 times (once a day for 3 days) for each group of children.

The results and discussion of Experiment I: (1) It was revealed that, at the beginning, the subjects glanced at each other and attempted to evade the glances of other subjects by looking at certain parts of the room. (2) As they recognized that each of them

was sharing the coincidence of being a stranger to the others, the first step in familiarity began to come into existence and their exploratory behavior toward one another became frank and more active. (3) Subsequently, to each child other children became cognitively differentiated, each seen with different degrees of preference. This step run parallel with the 1st one. (4) When the familiarity was being formed, a leader was emerging at each step. (5) The leaders in those occasions were the children who positively proclaimed the cognition of any kind of coincidence prior to other children. And status of one member in the group seemed to be determined according to the numbers of the other members who accepted the content of his proclamation and to the extent of their resonance with it. (6) It is presumed that the more glances received from other children or the more talks directed toward him, the higher status a child was given, and that the child who obtained the highest status became a leader.

The Procedure and Method of Experiment II:

A new member is called into the group of 4 children who had already become acquainted with one another and all were observed.

The results and discussion of Experiment II : (1) A new comer was accepted and participated in the group only after the cognition of coincidence on the part of both sides, a new comer and the existing group was formed. (2) The exploratory behaviors shown by the new member toward the other group members were more active than those shown by the latter toward the former. (3) As the familiarity between both grew, the other members were structured into the new member's cognition. (4) Thus, the preceding formation of familiarity between the new member and certain individuals of the first group contribute to let the new member be accepted by the group.